

慶成高等学校

令和6年度一般入学試験問題

# 国語

## 注意

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないでください。
- 2 問題は、1ページから10ページまであります。
- 3 解答はすべて解答用紙の所定の欄に記入してください。
- 4 解答用紙の※印の欄には、何も記入しないでください。
- 5 句読点は全て字数として数えてください。
- 6 試験時間は50分間です。
- 7 試験終了の合図で筆記用具を置き、解答用紙を裏返しにして、机の上に置いてください。
- 8 解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰ってください。

一 次の文章を読んで、後の各問に答えよ。

私たちは、いま話されている話し言葉一般を、空気のように自明のものとして使っているが、その多くは、先人によって作られた言葉だということを忘れてはならない。

先に示した様々な話し言葉のカテゴリ、「演説」「スピーチ」「教授」「対論」などはいずれも、明治の人びとが、血のにじむような努力で作り出した言葉だ。

旧帝国大学は、最初の一〇年、ほとんどの授業は、英語か、あるいはドイツ語、フランス語で行われていた。ただ、**ア**ここで、たった一〇年から二〇年で、多くの授業を教科書も含めて日本語で行えるようにしてしまった。いま、大学生たちは、当たり前のように日本語で授業を受けてノホホンとしているけれど、これは先人の努力のためのものである。

多くの途上国では、いまも高等教育の授業は、英語か、あるいは旧宗主国の言語で行われている。**イ**モロッコという国はワールドカップの開催国に立候補するほどの立派な中進国だが、中学校以上の授業は基本的にフランス語で行われていると聞く。こういった環境では、なかなか民主主義は育たない。言語の習得が、社会的な階層を、そのまま決定づけてしまうから。

論理的な事柄を自国語で話せるようにするには、ある種の知的操作や、それを支える語彙が必要で、自然言語のままではできないものではない。これは別にアジア、アフリカの言語だけに限った事柄でもない。たとえば、パスカルの書簡だったかと思うが、「これから先はちよつと込み入った話になるのでラテン語で書きます」といった文章が残っているそうだ。一七世紀、まだフランス語では、哲学を語ることはできなかった。

**ウ**、どの近代国家も、国民国家を作る過程で、言語を統一し、ただ統一するだけではなく、一つの言葉で政治を語り、哲学を語り、連隊を動かす、ラブレターを書き、裁判を起こし、大学の授業ができるように、その「国語」を育てていく。近代日本語もその埒外ではなかった。

ただ、日本語は、英語やフランス語が一五〇年から二〇〇年かけて行っただけでなく、この言語の近代化を、たった三〇年ほどではほぼ完成してしまった。その先人の努力に私は深く頭を垂れるが、しかし、その性急な過程では、当然積み残してきてしまったものがあるだろう。

その大きな積み残しの一つが、**【 I 】**の言葉ではなかったかと私は考えてきた。

たとえば一般によく言われることだが、日本語には対等な関係で褒める語彙が極端に少ない。上に向かって尊敬の念を示すか、下に向かって褒めてつかわすような言葉は豊富にあっても、対等な関係の褒め言葉があまり見つからないのだ。

欧米の言語ならば、この手の言葉には、まさに枚挙にいとまがなう。「wonderful」「marvelous」「amazing」「great」「lovely」「splendid」……。

しかし日本語には、このような褒め言葉が非常に少ない。そこでたとえば、スポーツの世界などで相手を褒めようとするときと外来語に頼らざるをえなくなる。「ナイス・ショット」「ナイス・ピッチ」「ドンマイ」……。

だが、ここに一つだけ、現代日本語にも、非常に汎用性の高い褒め言葉がある。

「かわいい」

これはとにかく、何にでも使える。

よく中高年の男性が、

「いまだきの子は、なんでも『かわいい』『かわいい』で、ボキャブラリーがないなあ」

とおっしゃっているのを見かけるが、ボキャブラリーがないのは、そう言っている私も含めたオヤジたちの方なのだ。

「対等な関係における褒め言葉」という日本語の欠落を「かわいい」は、一手に引き受けて補っていると言ってもいい。

【Ⅰ】の言葉が作られてこなかったために、近代日本語に欠落している要素は、いくつもある。

たとえば、いまは女性の上司―男性の部下という関係は珍しくなくなったが、女性の上司が男性の部下に命令するきちんとした日本語というのは、いまだ定着していない。

女性が管理職に就くと、その地位に慣れるまで、昔ならば「男勝り」と言われたような周囲がきつく感じてしまう言葉遣いか、あるいは過度に丁寧な言葉遣いになってしまう傾向がある。慣れてしまえば、そう問題にならないのだが、初めのうちはぎこちない雰囲気が職場に生まれてしまう。

他にも、病院などで、中高年の男性が入院した際に、若い女性の看護師さんから【Ⅱ】扱、い、されたと言って怒り出すケースもあるそうだ。

だがこれは、若い看護師さんの責任ではないと私は思う。

日本語の二〇〇〇年あまりの歴史の中で、女性が男性に命令をしたり指示したりする関係は、母親が子どもに指示する関係以外にはなかった。

関係がなければ言葉は生まれない。

(平田オリザ『わかりあえないことから』による。一部改変)

問一 本文中の空欄 **ア** **イ** に入る語句として最も適当なものを、次の1～5からそれぞれ一つ選び、番号を書け。

- 1 しかし
- 2 つまり
- 3 およそ
- 4 たとえば
- 5 他にも

問二 次の  の中は、「会話」と「対話」について筆者が説明したものである。

「会話」＝価値観や生活習慣なども近い親しい者同士のおしゃべり。

「対話」＝あまり親しくない人同士の価値観や情報の交換。あるいは親しい人同士でも価値観が異なるときに起こるその摺りあわせなど。

【I】に入れるのに適当なものは、「会話」か「対話」かを選び、そのまま書け。

問三 本文中にスポーツのくえ<sup>①</sup>なくなるとあるが、その理由を解答欄下の「から」という語句に続くように、本文中から二十五字以内で探し、そのまま抜き出して書け。

問四 本文中の汎用性の高い<sup>②</sup>と同じ意味の言葉を本文中から探し、七字でそのまま抜き出して書け。

問五 空欄【II】に入れるのに適当なものを、次の1～4から一つ選び、番号を書け。

- 1 年寄り
- 2 子ども
- 3 邪魔者
- 4 弱いもの

問六 本文中に③の理由を解答欄の「日本には」で始まり「から」という語句に続くように、五十字以上、六十字以内でまとめて書け。ただし**関係、言葉**という二つの語句を使うこと。



- (1) 次の【文章1】を読んで、後の各問に答えよ。

【文章1】

大学生の「僕」は水墨画家の篠田湖山の弟子として、水墨画の勉強をしている。本文は、学園祭で篠田湖山が水墨画を描く場面である。

湖山先生の背後にあるパネルに貼られた巨大な一枚の紙は、くつきりと湖山先生のシルエットを映し出した。おそらく立てかけたまま、絵を描くのだろう。

続いて千瑛が道具をお盆に載せてステージの上に登場し、ステージ横の台に載せて、墨をすり始めた。僕はその様子をステージの裾近くから見ていた。前列からびつしりと埋め尽くされた老人たちの目はキラキラと輝いている。

「皆さま、こんにちは。篠田湖山です。今日は秋の画題をやろうと思います。よろしく」と、それだけ言うと観客に背中を向けて、道具のほうにスタスタと歩いていった。

千瑛は墨をすりながらじゃまにならない位置に移動し、特に声を掛けることもなく自分の仕事に集中していた。確かにこのあたりの気遣いは、同じ絵師でないとできない。間近で墨をすりながら、じゃまにならずサポートするには、サポートするほうもそれなりに水墨の技法について習熟①していなければならない。湖山先生はいつもより少し大ぶりの筆を取って、筆洗に浸すと調墨を丁寧にしてから、真っ白な画面の前にぼつんと独りで立っていた。

観客は相変わらず静まり返っている。

何も起こってはいないが、何かが起こるのだという異様な緊張感が、会場に漂っていた。巨大で真っ白な壁の前に立つ湖山先生は、すべての音を吸い込むような不思議な静けさをまとっていた。

何が②それを与えているのだろうかと考えてみると、湖山先生が無造作に構えていた筆だった。その筆と手と身体と背中とまなざしのすべての一致が、会場の人たちの言葉を奪い去ってしまった。そこにいるだけで分かる。たった一つのこと傾注し、人生のすべてをそこに費やしてきたまるで奇

跡のような人物がそこに立っている。その人物がこれからその手で奇跡を起こすのだと、会場のすべての人が予感していた。僕もその場所にいながら、湖山先生以外は何も見えなくなってしまった。

湖山先生は筆を持ちあげた。たった一つの生命のように、同じ感覚の中に飲まれた僕ら観客は、それだけでオーケストラの指揮者がタクトを振り上げたときのように緊張した。そして、筆は振り下ろされた。

後は、奇跡と感動と快感の連続だった。

振り下ろされた大筆は、小刻みに叩きつけられ大きな葉になり、調墨し直された筆は深々とした滲みといっしょに実になった。無数の葉や実が描かれ、巨木が描かれ、それが何の樹なのか疑いようもなくなったところで、湖山先生は巨木を描いていた大筆から、いつもと同じ古びた鼬毛の筆に持ち替えた。会場の空気は少しだけ変わった。誰もが何かが起こる、ここから山場が来るのだという期待と緊張に満たされた。湖山先生の手いつもの鼬毛の筆は、そこにあるだけで大きな説得力があった。湖山先生は、筆を見て少しだけ微笑んだ。

そして、会場の隅にいた僕の方を見て、絵から意識を離して少しだけ笑った。先生は、いつもの調子だった。疲労してもいないし、緊張してもいない。当たり前先生の顔だった。先生は、僕に見ておけ、と言ったのだ。僕は背筋がブルブルと震えるのを感じた。

一歩前に出た湖山先生は、無造作に手を上げると上から下に向かって柔らかに線を引いた。柔らかに引かれた線は硬く、弾性を持ち、くねり、そして重力を感じさせた。誰もが分かった。それが上から下に向かって下がっているものなのだ。そして、それは絵の中で小さな風に吹かれてもいるのだ。存在しないはずの風を感じ、存在しないはずの重力を感じ、そこに存在しないはずの生き生きとした質感を感じた。それはただの線であり、ただ墨と筆がなす軌跡だった。だが、間違いなくその筆致には一瞬で命が宿っていた。

「蔓だ」

僕だけではない会場のすべての人が、わずか数秒で理解した。無造作に引いた線を葡萄の蔓だと理解した。

大きな葉と、いくつもの実や房、それから枝や莖や樹が、一本の蔓によって次々に結ばれていく。点在していた無数の命が一つの手によって、一個の生命に変わっていく。これまでに描いたいくつもの墨蹟が滲みながら、乾きながら、たった一つの意志によって繋がっていく。

多くの観客の目と心もいっしょに、湖山先生の手によって結ばれていく。

僕はそのときになって、なぜ湖山先生が僕に、やってみることが大事だということや、自然であることがたいせつだということ、それから絵は絵空

事だと言ったのか分かった気がした。

水墨画は確かに形を追うのではない、完成を目指すものでもない。

生きているその瞬間を描くところが、水墨画の本質なのだ。

自分がいまその場所に生きている瞬間の輝き、生命に対する深い共感、生きているその瞬間に感謝し賛美し、その喜びがある瞬間に筆致から伝わる。そのとき水墨画は完成する。「心の内側に宇宙はないのか？」

というあの言葉は、こうした表現のための言葉だったのだ。描くこと、形作ることに慣れ過ぎてしまうことで絵師はいつの間にか『描くこと』の本質から少しずつ遠ざかってしまう。それが見えなくなってしまう。湖山先生は、もしかしたらそのことを伝えたかったのかもしれない。描くことは、こんなにも命といっしょにしていることなのだ。

無数の命と命が結ばれていくその瞬間の中で、僕も観客も湖山先生も、描かれていくたった一枚の絵によって、線によって結ばれていった。<sup>⑤</sup>

線の時間が終わり、全体の調子を整えるために打っていく点の時間を、僕らはバラードを聴いているときのように名残惜しく感じていた。

湖山先生は筆を置いてこちらを振り返ると、ゆっくりと全体を見まわした後、朗らかに笑って、深々と礼をした。

小さく響いていた拍手は、まるで何かが爆発したときのように高い音で鳴り響いた。会場の数百人が力の限り手を叩いていた。多くの人は立ち上がり、立ち上がれなかった前列の老人は手を合わせて湖山先生を拜んだ。

万雷の拍手の中、巨大な葡萄の樹を背にして立つ湖山先生は照れ笑いしていた。湖山先生は、とても美しかった。会場は湖山先生を通して、水墨を経験した。僕の心にも、記憶にも湖山先生は同じものを描いた。最も美しいものが生まれる最初の瞬間から、最後の瞬間までを僕らは湖山先生といっしょに経験した。

(砥上裕将『線は、僕を描く』による。一部変更)

(注) 筆洗：筆の穂先を洗うための水を入れる器。 干瑛：「僕」の姉弟子。 調墨：墨と水を合わせること。 傾注：一つの事に心や力を集中すること。

画仙紙：書画用の大きな紙。 墨蹟：墨で書いたあと。 筆致：書画や文章の書きぶり。

問一 本文中に①習熟と同じ構成の熟語を、次の1～4から選び、番号で書け

- 1 土地    2 先手    3 足音    4 相性

問二 本文中の②その指すものとして適当な言葉を、本文中から二十字以内で探し、そのまま抜き出して書け。

問三 本文中に③僕は背筋がブルブルと震えるのを感じたとあるが、僕がこのように感じた理由を、二十五字以内で二つ考えて書け。

問四 本文中の④柔らかに引かれた線とは具体的には何のことか、適当な言葉を、本文中から一字で探し、そのまま抜き出して書け。

問五 次の文は、本文中の⑤結ばれていった<sup>a</sup>について、「僕」が考えたことについてまとめてある。アに入る内容を本文中から二十五字以内で探し、そのまま抜き出して書け。また、イに入る内容を、十字以内でまとめて書け。

湖山先生が描く線によって、アが結ばれ、一個の生命へと変わったと同時に、イもいっしょに結ばれ、水墨を経験したと考えた。

(2) 次は【文章1】を読んで、絵画に興味を持った羽鳥さんが読んだ【文章2】である。これを読んで、後の各問に答えよ。

### 【文章2】

中国や日本の山水画などでは、何も描かれていない部分<sup>a</sup>がいくらでもある。ときによると、花の咲く木を一本だけ、鳥を二、三羽だけ描き、バックに何も描いていないようなものでも、立派に背景のある絵として成立している。こういう絵は、合理主義的な、物理的な空気空間の意識をもつヨーロッパの美意識からすると、このうしろは何ですか、壁ですか、空ですか、と尋ねたくなるだろう。

東洋人にとって、何も描かれていない背景は、空やかすんだ風景などのいづれでもあり、いづれでもないものである。そこに描かれているのが一本の小枝、一つの花、小鳥であっても、描こうとしているのは宇宙のひろがりであり、生命の美しさであるからだ。自然の中の細かい一部分を画題にはしていても、それを象徴的に描こうとしている。そこに何かある以上は描かなければならない、空間を埋め尽くさなければならぬというはっそうをもともと持っていない。東洋画では、空間を可視的なものによって想像する必要がないのである。

そういう東洋画、とりわけ日本の絵には、写実という観念が希薄だった。むしろ自然を描くに当たっても、その心を表す写意が尊ば

れた。日本の絵は、大和絵にしても、琳派にしても浮世絵にしても、それぞれにかなり様式化されているように見える。しかし、どう様式化されても、描こうとしているのは自然のもっている生命であって、それをとらえていない絵はつまらないものになる。様式そのものをなぞっても、本当の絵にはならない。

(平山郁夫『絵と心』による。一部変更)

合理主義…理性によって物事を判断し、解釈しようとする態度。

象徴的…具体的な物事が、形のない抽象的なものをわかりやすく表現していること。

写実…実際の状態をそのまま絵に描いたり、文章に書いたりすること。

観念…ある物事に対して頭の中に浮かぶ内容。

琳派…美術の流派の一つ。作品は構図が大胆で装飾性が高い。

様式化…決められた型に合わせていくこと。

問一 本文中の日本の絵<sup>①</sup>とあるが、これについて説明したものとして適当なものを、次の1～4から全て選び、番号で書け。

- 1 空間を埋め尽くすという発想で描かれている。
- 2 自然の画題が象徴的に描かれている。
- 3 合理主義的な考え方で描かれている。
- 4 心を表す写意が尊ばれる形で描かれている。

問二 本文中の本当の絵<sup>②</sup>がとらえていることはどのようなことだと筆者は考えているか、本文中から十字以内で探し、そのまま抜き出して書け。

問三 本文中の線を施したa、b、cのうち、品詞が異なるものを一つ選び、記号で書け。

問四 本文中のはっそうの—線を施した部分に適切な漢字を当てるとき、そうと同じ漢字を用いるものを、次の1～4から一つ選び、番号で書け。

- 1 演そうう会に出席する。
- 2 発そう準備が整う。
- 3 あらゆる事態をそう定する。
- 4 新しい像をそう造する。

問五 濃厚の対義語を、本文中から探し、そのまま抜き出して書け。

問六 本文中で用いられている間の文字を行書で書くとき、点画の省略が見られる。同じような特徴を持つ漢字として適当なものを、1～4から一つ選び、番号を書け。

間 1 花

2 鳥

3 水

4 枝



三

次の文章を読んで、後の各問に答えよ。

宋人に玉を得るもの或り、諸を子罕に献ず。子罕受けず。

玉を献ずる者曰く、「<sup>①</sup>以つて玉人に示すに、玉人以つて宝と為せり。ゆゑに<sup>②</sup>敢へて之を献ず。」と。

子罕曰く、「我は貪らざるを以つて宝と為し、爾は玉を以つて宝と為す。若し以つて我に与へば、皆宝を喪ふなり。人其の宝を有するに若かず。」と。

(劉向『新序』による)

(注) 玉…宝玉。 子罕…宋の政治家。 玉人…宝玉を磨く職人。 爾…お前 若かず…及ばない。

問一 本文中のゆゑにを現代仮名遣いに直し、全て平仮名で書け。

問二 文中の<sup>①</sup>以つて玉人に示すにという書き下し文になるように、解答欄の漢文の適当な箇所に戻り点をつけよ。

問三 本文中の敢へて之を献ずの解釈として最も適当なものを、次の1～4から一つ選び、番号を書け。

- 1 進んでこれを献上したのです。
- 2 わざとこれを献上しなかったのです。
- 3 わざわざ行って献上したのです。
- 4 意識的に行って献上しなかったのです。

問四 次の□の中は本文を読んだ先生と生徒が会話をしている場面である。□Xに入る文を、七字以内で考えて書け。また□Yに入る語句を

本文中から探し、五字でそのまま抜き出して書け。

先生 「玉」とは美しい石のことで、この時代では一般的に宝とされてきました。

生徒 でも子罕は受け取らなかった。なぜだろう。

先生 「玉」は当然すばらしい宝ですが、子罕には大切にしているものがありましたよね。

生徒 「貪らざる」ですよね。□X「<sup>X</sup>」という意味ですか。

先生 そうですね。玉を受け取ってしまうと、これに反する。

生徒 なるほど。「玉を得るもの」も玉を失うので□Y「<sup>Y</sup>」ということになるのですね。



問五

本文から読み取れる子罕の考え方に合致するものとして最も適当なものを、次の1～4から一つ選び、番号を書け。

- 1 お互いが利益を得られるならば、自分の信条を曲げて相手に合わせてもよい。
- 2 人それぞれ大事にしているものが違うので、利益は必ず争いを生んでしまう。
- 3 たとえ利益が得られなかったとしても自分が大事にしている美徳を守るべきだ。
- 4 どちらかしか利益を得られないならば、相手の利益を優先する方が美徳である。

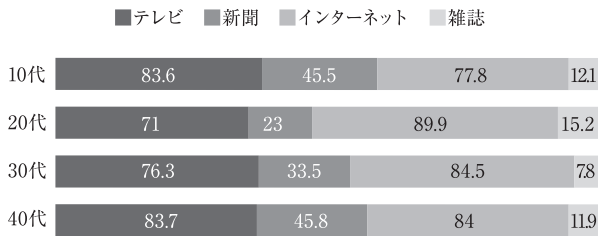
## 四

次の資料は「メディアの重要度と信頼度」のアンケートの結果である。(条件)に従い作文せよ。

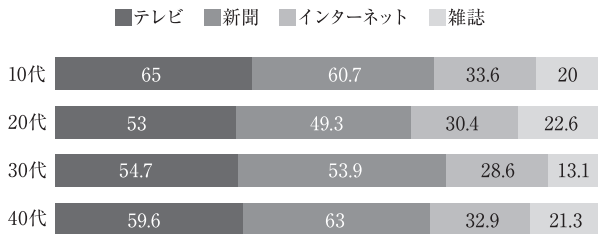
(条件)

- 1 文章は二段落構成とする。
- 2 第一段落には「資料1」、「資料2」からわかることをどちらのグラフにも触れながら書くこと。
- 3 第二段落には、第一段落を踏まえ、自分自身の日頃のメディアとの具体的な関わりを書くとともに、あなたが信頼できる情報を得るために心がけていること書くこと
- 4 題名と氏名は書かず、原稿用紙の正しい使い方に従い、七行以上九行以内で書くこと。ただし、文の数は問わない。

### 【資料1】 情報を得るための手段としての重要度



### 【資料2】 メディアの信頼度



総務省情報通信政策研究所「令和4年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査」の結果を基に作成

〈重要度〉

それぞれのメディアが「情報を得るための手段(情報源)」として、どの程度重要と評価しているか、回答を「全部信頼できる」「大部分信頼できる」「半々くらい」「一部しか信頼できない」「まったく信頼できない」の5件法で求めた。集計に当たっては、「全部信頼できる」と回答したものを合計し、「信頼度を」とし、表している。

〈信頼度〉

それぞれのメディアにどの程度信頼できる情報があると考えられているか、回答を「全部信頼できる」「大部分信頼できる」「半々くらい」「一部しか信頼できない」及び「まったく信頼できない」の5件法で求めた。集計に当たっては、「全部信頼できる」と回答したものを合計し、「信頼度」とし、表している。